

小田原駅西口コース

小田原駅西口スタート ※健脚向け

1 北條早雲公像

小田原駅西口から 0.1km/約1分



平成2年小田原市制50周年を記念して造られた。題字は晩年小田原に住んだ文学者中河与一の筆で、その代表作「天の夕顔」は6カ国語に翻訳されている。同人雑誌「ラ・マンチャ」を創刊し多くの文学者を育てた。

2 北村透谷の墓(高長寺)

北條早雲公像から 0.5km/約7分



近代文学の先駆者と言われ、「恋愛は人生の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり」で始まる「厭世詩家と女性」は当時の若者の心をとらえた。この墓は透谷没後60年にあたる昭和29年、東京の瑞聖寺から北村家の菩提寺である高長寺に移された。

3 大久保神社(泉鏡花「千歳の鉢」の舞台)

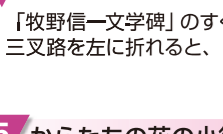
北村透谷の墓から 1.6km/約23分



この神社は初め小田原城天守閣跡地に建てられたが、御用邸が出来ることでこの地に移された。祭神は小田原藩初代藩主大久保忠世と九代藩主大久保忠貞が合祀されている。泉鏡花の「千歳の鉢」は、境内にある大久保忠一書の人寿千年之鉢にまつわる優雅で幻想的な小説。

4 文学の小径

大久保神社から 0.3km/約5分



「牧野信一文学碑」のすぐ隣に小峰配水池の正門があり、その前を通り過ぎ三叉路を左に折れると、「井上康文詩碑」と福田正夫の「民衆碑」がある。

5 からたちの花の小径

文学の小径から 0.5km/約8分



からたちの花が咲いたよ 白い花が咲いたよ からたちのとげはいたいよ 青い針のとげだよ からたちは畑の垣根よ いつもいつもとおる道だよ 白秋が野外劇場の観客席のようだ絶賛した風景に出会える。

6 北原白秋旧居跡(伝蔵寺)

城南中学校グラウンド前から 0.7km/約13分



白秋は二番目の妻章子と養生館、御花畑、伝蔵寺と移り住む。赤貧洗うが如しの暮らしだった。伝蔵寺境内に初めての家「木兎の家」をつくるも章子と別れ、三番目の妻菊子とめとり、隆太郎、篁子をもうけ、漸く幸せな家庭生活を得た。

7 人車鉄道・軽便鉄道の小田原停車場跡

伝蔵寺から 0.5km/約8分



多くの文人墨客がこの駅から湯河原・熱海へと向かった。芥川龍之介はこの人車鉄道を題材に作品「トロッコ」を書いている。

8 三好達治旧居跡

人車鉄道・軽便鉄道の小田原停車場跡から 0.3km/約4分



昭和14年鎌倉から早川口に移ってきて「春の岬」「岬千里」などの詩集や随筆を出版。早川決壊による水害で十字に転居し「一点鐘」を刊行。昭和19年突然妻子を残し小田原を去ってしまった。昭和5年の処女詩集「測量船」の中の太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。はあまりにも有名。

9 谷崎潤一郎旧居跡

三好達治旧居跡から 0.2km/約3分



大正8年十字の大坪邸に引っ越してきたが、小田原に来よう勤めたのは北原白秋だった。この地で、佐藤春夫と文壇で俗に小田原事件といわれる「細君譲渡事件」を起こしている。大正10年に佐藤春夫が発表した「秋刀魚の歌」は、この事件を彷彿させる詩で有名。

小田原文学館へ(谷崎潤一郎旧居跡から) 0.1km/約1分

小田原駅東口コース

小田原駅東口スタート

1 松本駅長殉難碑

小田原駅東口から 0.3km/約5分



昭和16年7月の暴風雨の夜、小田原駅第6代目の松本宇一駅長が殉職し、その功彰の碑文を親交のあった菊池寛が書いている。菊池寛の先祖は小田原北条氏に仕えていた。

2 だるま料理店

松本駅長殉難碑から 0.6km/約10分



川崎長太郎が毎日のように散歩の途中に立ち寄り、ちらし丼を食べた老舗の料理屋。建物は国登録有形文化財で重厚な造りである。

3 北原武夫生家跡

だるま料理店から 0.2km/約2分



明治40年、元陸軍軍医北原信明の長男として、小田原で生まれた。宇野千代のすすめで都新聞社を辞め、作家生活に入る。昭和14年藤田嗣治と吉屋信子の媒酌で十歳年上の宇野千代と結婚。代表的作品の「妻」は芥川賞候補になった。

4 井上康文生家跡

北原武夫生家跡から 0.1km/約1分



生家は割屋敷で「紺登」という染物業を営んでいた。小学校の頃より詩や俳句に親しんでいた。大正7年福田正夫が主宰する詩誌「民衆」に参加。その後中央の詩壇で活躍。小田原を愛し、梅を愛し、風土を愛し多くの詩を書いている。

5 北村透谷生家跡

井上康文生家跡から 0.3km/約4分



近代文学の先駆者といわれる北村透谷は、明治元年、祖父が小田原藩の藩医という家に生まれた。翌明治2年藩主大久保忠良は版籍を奉還し大勢の藩士が食禄を失い、父快蔵は昌平学校に学んだ後大蔵省へ出仕した。透谷は小田原に残って厳格な祖父母に育てられた。後に、島崎藤村らと日本のローマン主義の先駆けといわれる「文学界」を創刊。

6 川崎長太郎小屋跡碑

北村透谷生家跡から 0.3km/約5分

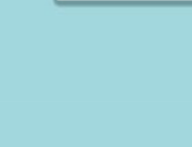
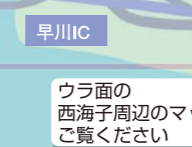
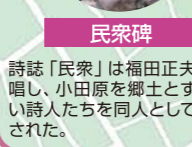
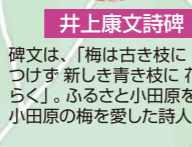
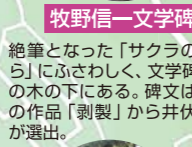
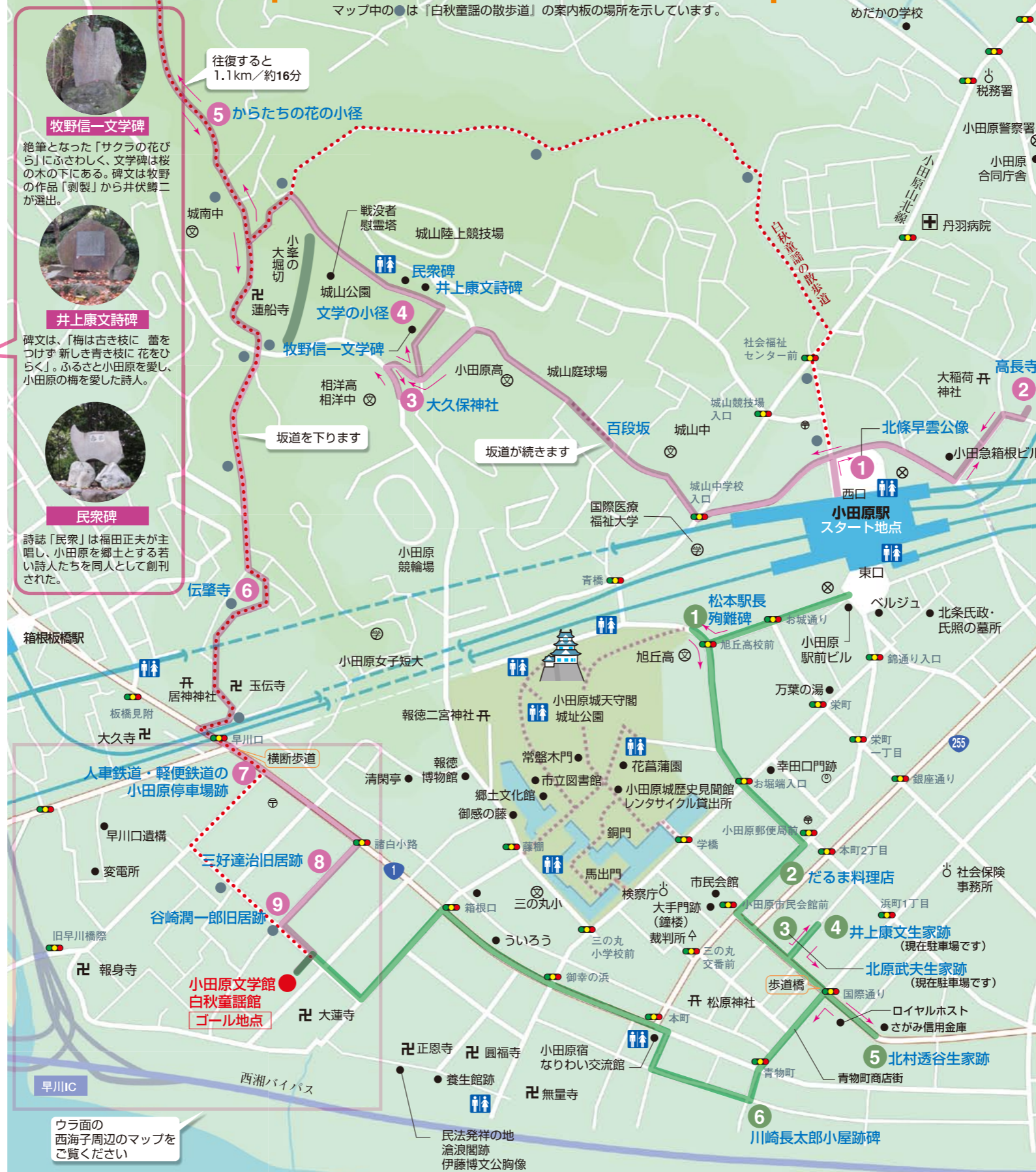


生家はこの地で箱根の温泉旅館相手に魚屋を営んでいた。文学を志して上京したが生活に行き詰まり昭和13年に小田原に帰った。実家裏の電気も水道もない小屋で、ビール箱を机代わりにローソクの灯かりで名作「抹茶町」は書かれた。早川の真福寺には「川崎長太郎文学碑」がある。

小田原文学館へ(川崎長太郎小屋跡碑から) 1.1km/約16分

おたわら文学散歩マップ

マップ中の●は「白秋童謡の散歩道」の案内板の場所を示しています。



白秋童謡の散歩道

小田原駅西口と白秋童謡館(小田原文学館)を結ぶ約4キロメートルの「白秋童謡の散歩道」として整備されています。散歩道の随所には、道案内のサインが埋め込まれており、ゆかりの童謡の案内板も設置されています。大正7年から15年までの8年余りを小田原で過ごした北原白秋は、現在の城山公園周辺をよく散策し、多くの童謡のインスピレーションを得たとされています。

「私には私としての幼時の追憶や、小田原水之尾道で見た必然的なからたちの花の縁由がある。『からたちの花』は大正十三年五月十三日の作である。」

(北原白秋著「緑の触覚より」)

このように白秋自らが記していることから、代表作である「からたちの花」は、水之尾への小径を散策したことが契機で創作されたものであることは、想像に難くありません。この水之尾道の一部が「からたちの花の小径」と名づけられ、石柱が設置されています。

ウラ面の西海子周辺のマップをご覧ください

御幸の浜